

札幌軟石 4 万年の旅 ―地史を揺るがす大噴火から“カワイイ”まで

■概要

札幌軟石は、約 4 万年前に起きた支笏火山の大噴火による火砕流が冷え固まったものです。明治時代以来、建築材料として使われたのはもちろん、採掘や運搬の歴史においても大きな軌跡を残しています。今なお切り出しが行われ、カワイイ雑貨やインテリアへの用途も広がる札幌軟石は、地産地消の資源として進化を続けています。

■ストーリー

約 4 万年前、支笏火山は巨大噴火を起こしました。火山灰や軽石は高さ 3 万 m まで噴き上げられて広く降り積もり、火砕流が流れ下りました。これらの噴出物は、太平洋に注いでいた石狩川の行く手を阻み、流路を日本海に変えてしまったほどの膨大な量だったとも言われています。それが冷えて固まった溶結凝灰岩が、札幌軟石です。支笏火山の跡は大きくぼ地になって水が溜まり、カルデラ湖の支笏湖となりました。

それから遥かな時が流れた明治時代、開拓初期の建物は木造で断熱性が低く、寒さをしのぐために家の中で火を焚くことも多かった北海道では火災が深刻な問題でした。そこで開拓使は、米国より招いたお雇い外国人、ホーレス・ケブロンらの助言を受け、耐火性の強い建材として札幌軟石に着目します。商家の蔵、店舗、公共建築、教会、倉庫など軟石建物が次々に建てられました。空隙率が高く保温性も優れていたのも、野菜や果物の保管、酒・味噌・醤油の醸造庫としても最適でした。東区や北区ではタマネギ倉庫、豊平区ではリンゴ倉庫、厚別区ではサイロなど地域の特性を反映して多彩な使われ方をしました。

札幌軟石の切り出しは、昭和になってチェーンソーが導入されるまで、石工の手によるものでした。ツルハシで石に溝を作り、金矢を打ち込んで石を浮かせて割り出すのです。石工がツルハシを振るう回数は 1 日数万回にもなったとか。割り出されたままの石の表面から凸凹をツルハシで取り除くことを野取りといい、仕上げには熟達した石工の技が冴えました。



つるはしなど石切りに使う道具

運搬の面では札幌の交通にも大きな影響を与えました。札幌軟石を運ぶため、明治 42 年（1909 年）に石山から南 2 条西 11 丁目付近まで馬車鉄道が敷設されました。現・国道 230 号の通称「石山通」は、石山の軟石をはじめ、硬石など地域産の石材が運ばれた道であったことに由来します。大正 7 年（1918 年）には豊平と定山^{じょうざんけい}溪を結ぶ定山溪鉄道が開業し、石山地区には石切山^{いしきりやま}駅もできました。今、駅舎は石山振興会館となり、ぽすとかん（旧石山郵便局）とともに地域の拠点になっています。ぽすとかんのインテリアには札幌軟石のアートがあしらわれています。

街に深い情感を添え、かけがえのない景観を形づくってきた札幌軟石。鉄筋コンクリートの時代になって軟石建物は減っていますが、平成 27 年（2015 年）の調査では市内に約 300 棟以上が残っており、飲食店やギャラリーとしても活用されています。そのような中、令和 2 年 12 月に札幌市資料館（旧札幌^{こうせいん}控訴院庁舎、大正 15 年（1926 年）建築）が国の重要文化財に指定されました。美しさはもちろん軟石^{れんが}と煉瓦を組み合わせた構造、2 階床の鉄筋コンクリートの採用など新旧の建築技術が融合していることも評価されました。

石山地区を訪れると、採掘跡が古代遺跡を思わせるアート空間として整備された石山緑地^{もなみ}や、藻南公園の札幌軟石ひろばとして野外展示された最古の採掘跡も見ることができます。吸水性の良さを生かしたかわいいアロマストーンや、コースターに変身した札幌軟石を購入することもできます。地史を揺るがす大噴火から 4 万年。札幌軟石は遙かな旅の途上で進化を続けています。



札幌市資料館（旧札幌控訴院庁舎）



石山緑地